2023年5月掲載
2024年2月更新

研究を通じて弱い立場にある人々の声を社会に届け、
生まれ育った環境に関わらず全ての人が安心して健康に過ごせる社会作りに貢献したい

おおかわ　すみよ
大川　純代

国際医療協力局
運営企画部・保健医療開発課
グローバルヘルス政策研究センター併任
上級研究員

★略　歴

2002年	大阪府立看護大学看護学部 卒業
2002年-2007年	国家公務員共済組合連合会虎の門病院 血液科
2008年-2010年	東京大学大学院医学系研究科国際地域保健学教室 修士課程
2010年-2013年	東京大学大学院医学系研究科国際地域保健学教室 博士課程
2013年-2016年	東京大学大学院医学系研究科国際地域保健学教室 特任研究員 ガーナEMBRACE実施研究プロジェクト（JICA）
2016年-2017年	ハーバード大学T.H. Chan公衆衛生大学院武見国際保健プログラム
2017年	WHO健康開発総合研究センター（WHO神戸センター）
2018年-2021年	大阪国際がんセンターがん対策センター疫学統計部
2021年-	国立国際医療研究センター 国際医療協力局 入局
2023年12月	WHO本部ガイドライン評価委員会外部委員に就任

★現在の主な担当業務

・国際医療協力局運営企画部・保健医療開発課/グローバルヘルス政策研究センター併任
・国際医療協力局およびNCGM研究所との共同研究

等

――― 大川さんが、医療職・国際協力を目指したきっかけを教えて下さい。

私が国際協力を目指した最初のきっかけは、1994年に起きたルワンダでの大虐殺でした。当時、私は中学生でした。ある日の新聞で「目の前で母親を虐殺されて、声を失った少女」という記事を見ました。大切なお母さんが暴力を受けて死んでいく姿を見せつけられることは、なんと残酷で悲しいことかとショックを受けました。

この記事がきっかけで、なぜ生まれ育った環境によって待ち受けている人生がこんなにも違うのだろうか。世界のほんの一部の人が豊かな生活をしているために、残りの多くの人が貧しい生活を強いられ、そこからくる苦しみや怒りから紛争が起きてしまうのではないかと考えるようになりました。

そして、生まれ育った環境に関わらず、全ての子どもたちが安心して健康に育っていける世界を作る仕事に関わりたいと思うようになり、まずは看護師になることを決めました。

――― 国際医療協力局に入職する前はどのようなキャリアを積まれていたんですか。

大学卒業後は都内の病院で勤務し、臨床5年目に入ると次のステップに進みたいと思うようになりました。

ちょうどその頃、ルワンダの大虐殺を描いた「ホテル・ルワンダ」という映画を観ました。映画の中で、「あの（虐殺）映像を流せば、世界は私たちを助けてくれるだろう」「いや、世界の人々は、その映像を見て、怖いねというだけでディナーを続けるよ」という会話の場面がありました。

私は「ディナーを続ける人」ではなく、「助けに行く人」になりたい、と強い気持ちを抱きました。大変な環境下で暮らしている子どもたちのところに行って仕事がしたい、そのためにもう一度勉強したいと思い、病院を退職しました。しかし、退職した直後は、どこに向かって歩んでいけばよいのか全くわかりませんでした。ひとまず日本ユニセフ協会でインターンをさせていただくことにし、偶然にも国際保健学という学問があることを知りました。タイミングよくオープンキャンパスに行き、国際保健学は私が学びたかった学問だと確信しました。インターンを途中で打ち切り、受験勉強に励み、大学院に進学することが決まりました。

紛争から15年後に初めて訪れたルワンダ

大学院では弱い立場にある子どもたちの支援につながる研究に取り組みたいと考え、「アフリカ、HIV、子ども」をテーマにしました。そして、ケニアの首都ナイロビのスラムに暮らすHIVで親を亡くした子どもたちの心の状態や社会支援に関するフィールド調査を実施しました。治安の悪いナイロビで、最小限の小銭、NOKIAの小さな携帯電話、調査票の束だけを携えてフィールドに通い、約400人の子どもたちのデータを集めました。これらのデータは統計分析によって平均値や割合としてまとめられますが、その数値はとても無機質なものです。

しかし、親を失った悲しさと、貧困の苦しさを背負いながら生きている子どもたちの表情を思い出しながらその数値を見つめると、それは子どもたちの声のように見えてきて、その数値が何を伝えようとしているのか自然とわかりました。研究が直接この子どもたちの生活を変えるわけではありません。しかし、論文を書くことで彼らの小さく弱い声を世界に伝えることができると初めて論文が掲載された時に思いました。それが私にとって研究をする意義となりました。

ナイロビのスラムで親を失った子供たちの調査で一緒に働いたチーム

また、ザンビアではHIV母子感染予防に関する研究に取り組みました。妊婦検診でＨＩＶと診断された母親を１年以上追跡し、生まれてきた子どものＨＩＶ感染や生存状況を調べました。母子感染の予防薬は無料で提供されていましたが、母親の知識不足、パートナーからの差別など様々な理由で予防薬を途中でやめてしまう母親が多くいました。また、追跡調査に行く度に、HIVに感染し、生後間もなく死亡した子どもがいることが確認されました。これらの感染、死亡の情報をデータベースに入力する度に、健康に生まれることができなかった子どもたちのことが目に浮かび無念でした。

そして、調査で得たデータは一人ひとりの声や命として敬意をもって扱っていかなければならないと思うようになりました。これまでに様々なデータを分析してきましたが、データ一つ一つを構成する個人を大切にすることを心がけています。大学院では研究手法だけでなく、研究者として忘れてはならない倫理観を学びました。

ザンビアのHIV母子感染予防の研究で一緒に働いたチーム

ザンビアのチョングヘルスセンターで毎日一緒に働いた女性たちと

大学院博士課程が修了したその日、私はガーナに向かい、母子保健継続ケアの研究プロジェクト（ガーナＥＭＢＲＡＣＥ実施研究）に3年間従事しました。その後、ハーバード大学T.H.Chan公衆衛生大学院の武見国際保健プログラムのフェローとして、１年間論文執筆に専念しました。年齢はすでに３０代後半となっており、このままグローバルヘルスの仕事に邁進したいという思いを抱えつつも、家庭を持ち、子どもを育てる経験もしたいという気持ちも強くなりました。また最愛の母が癌の末期にさしかかっていました。迷うことなく、実家のある大阪に帰ることにしました。そして、母の看病をしながら、大阪国際がんセンターで研究職として仕事を続けることになりました。大阪では国際保健からいったん距離を置くことになりましたが、日本のがん対策に関する法律、計画、実施について体系的に知り、行政に近いところで仕事をすることができたので、とてもよい経験になりました。

ガーナEMBRACE実施研究プロジェクトでお世話になったキンタンポ・ヘルスリサーチ・センターの上司と

ガーナ北部の出張中に出会った元気な子どもたちと

国際医療協力局に入局したきっかけ、理由を教えて下さい。

2021年から結婚を機に東京に戻ることになりました。もう一度グローバルヘルスのフィールドに戻りたいと思い、就職先として真っ先に思い浮かんだのがNCGMでした。幸い、国際医療協力局とグローバルヘルス政策研究センターを併任する研究職として採用していただきました。現在は、主に国際医療協力局やNCGM内の研究所と共同研究を行っています。研究テーマはB型肝炎、糖尿病、子宮頸がんなどを扱っており、私にとっては初めての分野です。論文を書くのはその分野に関する知識が必要なので、文献を読んで勉強しなければなりません。しかし、研究チームの中には専門性に長けたメンバーがそろっているので、足りない知識を補ってもらうだけでなく、多くのことを教わることができてとてもやりがいがあります。

また、国際医療協力局では他の局員の経験が共有される会議が毎日のように開催され、学ぶ機会にとても恵まれています。最初は学ぶだけで満足していましたが、次第に私も協力局に貢献したいと思うようになりました。そこで、今年からデータ分析と論文執筆に興味のある局員を募り、技術的なサポートを始めました。現在、5人の局員と一緒に論文を書いています。こつこつ努力が必要ですが、自分自身がサポートする側になって改めて学ぶことも多いです。

今後はどのような展望、夢をお持ちですか。

グローバルヘルスの世界に入って今年でちょうど15年目になります。研究職としてのキャリアを選んできたというよりは、キャリアパスの視界は決して明るくはなく、行き止まりにぶつかったら、目の前に開いたドアに飛び込むことを繰り返してきたのが正直なところです。実際、この15年間で所属先は6回変わりましたし、仕事がない時期もありました。しかし、様々な研究に携わる機会が与えられて、それが研究者としてのステップアップにつながったので、とても恵まれていたと思います。

COVID-19の流行が去り、国際医療協力局も以前の活気が戻り、毎月多くの局員が海外を渡航しています。

一方、私は2022年4月に出産したため、現在は日本で仕事と母親業の両立に奮闘する日々です。海外で仕事ができる局員の姿を眩しく眺めつつ、私もまたよい時がきたら、研究の経験を生かした実務者としてもう一度海外のフィールドで仕事をしよう、今は力を蓄える時期だと言い聞かせて仕事に取り組んできました。

そんな矢先の2023年7月、世界保健機関（WHO）ガイドライン評価委員会の外部委員に応募する機会が訪れました。自分にはやや背伸びをした仕事かと思いましたが、国際医療協力局には高い専門性と豊富な現場経験を生かし、国際的規範・基準づくりに貢献している局員もいるため、履歴書のアピールの仕方の助言や、ガイドライン策定の実際についての情報をいただき、応募に挑戦することができました。その後、WHO本部より任命の知らせをいただき、同年12月より会議に出席しています。ガイドライン評価委員会は、WHOから新たに発行されるガイドラインが、科学的エビデンスに基づき、かつ公平性、人権、ジェンダー、実施可能性等にも配慮されているかについて、主に策定方法（Methodology）について評価します。今、私は仕事に慣れるために必死で勉強しているところですが、WHOガイドラインが世界中の人々の健康と格差を改善するためのあらゆる保健医療活動の根幹であることを想像すると、外部委員としての役割に責任を感じます。また、この経験が私の専門職としての将来の可能性を広げてくれると思うとやりがいを感じます。

NCGM

2024年1月23日
National Center for Global Health and Medicine
国立研究開発法人 国立国際医療研究センター
国際医療協力局

報道関係 各位

国立国際医療研究センター
国際医療協力局（グローバルヘルス政策研究センター併任）の
大川 純代（おおかわ すみよ）上級研究員が
WHO 本部ガイドライン評価委員会外部委員に
任命されました

国立研究開発法人 国立国際医療研究センター（NCGM）国際医療協力局（グローバルヘルス政策研究センター併任）の大川純代上級研究員が、WHO（世界保健機関）本部の『ガイドライン評価委員会外部委員（External member, Guideline Review Committee, WHO）』に任命されました。

ガイドライン評価委員会は、WHO スタッフメンバーと、様々な専門性や経験をもとに世界中から選任された外部委員で構成され、WHO から発行されるすべてのガイドラインに関し、その内容および策定の方法に、それぞれの専門性と経験から貢献する役割を担います。

大川上級研究員は、疫学・母子保健・がん等の領域における専門性と経験を活かし、2030 年の SDGs の保健関連課題達成のため、その職責を果たしてまいります。

大川上級研究員は、今回の任命にあたり「WHO ガイドラインは、世界各国の保健政策や実践の指針となるので、科学的エビデンスがあり、公平性、人権、ジェンダー等にも配慮されている必要があります。世界の専門家の知恵を集結して作られたガイドラインを丁寧に貢献し、世界に送り出したいです。」と抱負を述べています。任期は 2023 年 12 月から 3 年間の予定です。

大川純代上級研究員

1

世界保健機関（WHO）ガイドライン評価委員会の外部委員就任を知らせる
ニュースリリース

――――最後に、これから国際医療協力の世界を目指そうとしている人にメッセージをお願いします。

国際医療協力のキャリアパスは明確なものはなく、目指したいと思っても身近にロールモデルがいないことはよくあると思います。また、国際医療協力の道に進むと、仕事とプライベートの両立が難しいというイメージもあると思います。私自身も道なき道を歩んできたため履歴書はつぎはぎだらけですし、仕事とプライベートのどちらをとるかを自分に問いながら歩んでいた時期もありました。しかし、国際医療協力局に入って、そのイメージはずいぶん変わりました。海外出張で忙しい局員が多いですが、中には家族のケアのため日本で地道に勤務している局員もいます。国際医療協力局は、局員がプライベートを大切にしながら、サステナブルな形で国際医療協力を続けられる雰囲気と環境が整っており、国際医療協力を目指す人にとっては理想的な職場だと思います。

世界的に取り組むべき健康課題は未だにたくさんあり、国際医療協力の担い手はますます必要になってくると思います。個人のライフステージに応じて、今やりたいこと、すべきことを優先しながら、国際医療協力をライフワークとして地道に続けていくことができれば理想的です。今はそれができる時代になってきていると思います。国際医療協力を目指している方は、まず一歩を踏み出してみてください。道は少しずつ繋がっていくと思います。

――――ありがとうございました。